

中間恐慌および部分的恐慌

佐藤 定 幸

1

過剰生産恐慌の一般性、すなわち過剰生産恐慌は特殊の商品ないしは特殊の生産部門だけにかぎられるものではなく、全生産部門に及ぶものであることは、いまさらあえていうまでもない。

しかしこのことは、現実の恐慌がつねに一切の商品ないし生産部門を同時にとらえることを意味しない。いやそれどころか、現実の恐慌では、一切の商品ないし生産部門が同時に過剰生産におそわれることはありえない。これは資本制生産の不均衡性からして當然のことで、「もしも過剰生産が同時に同程度に発展しなくてはならないというなら、一般に資本制的生産は不可能だということになるだろう。これらの諸部面における過剰生産が絶對的に生ずるから、過剰生産されていない部面においても相對的に過剰生産が生ずるのである¹⁾。」

過剰生産は、まず指導的諸商品にあらわれ、これが他の商品におよび、ついには全生産部門に波及する。マルクスのいうように、「恐慌が（したがってまた過剰生産が）一般的であるためには、恐慌が主要な諸商品をつかめばたり²⁾。」主要な商品、たとえば自動車の過剰生産が、自動車生産に関連ある諸商品を生産する産業——鐵鋼、ガラス、ゴムなどの諸産業に過剰生産をひきおこし、ついには1國の經濟を過剰生産恐慌にまきこむことは、現実の恐慌現象のなかではっきりと示されているところである。

以上のべられたかぎりでは、あれやこれやの商品ないしは生産部門から始まるとしても、過剰生産恐慌はつねに一般的過剰生産恐慌に發展するものとして考えられている。しかしながら、われわれが現実の恐慌史を検討してみるならば、そこには一般的過剰生産恐慌以外の恐慌があることを發見するであろう。だが、このことはマルクスの恐慌論の誤りないしは限界を示すものではない。たしかに、現実的恐慌はマルクスの經濟學の篇別のなかでは、第5、世界市場と恐慌（經濟學批判、マル・エン選集、補卷3、288頁）で取扱われるはずであって、それ

は「資本論」のなかでは研究の枠外におかれた。とはいえ、そのことはマルクスの恐慌論が現実の恐慌の理解に當っての有效性を否定するものではない。事實、マルクスとエンゲルスは、多くの斷片的文章のなかではあるが、現実の恐慌にかんし重要な指摘を行っており、これをかれらの經濟學說と統一的に理解することが必要である。

ここで中間恐慌および部分恐慌について小論をのべるのは、一般的恐慌以外の恐慌についてマルクスとエンゲルスがのべたところをよりどころとして、現実の恐慌分析に進もうがためである。たとえば、ヤ・クロンロード Я. Кронрод は第2次世界戦争後のアメリカの景氣循環についてのべつつ、こういっている。「1948~49年の經濟恐慌は、戦後の循環の進行中に、資本主義の矛盾が急速に深まったことを示す明白な指標の1つである。この恐慌は特殊な性格をおびていた。すなわち、それはアメリカだけにおこり、工業の一部の部門だけをとらえた。したがって、われわれの意見ではこの恐慌はアメリカにおいても他の資本主義國においても、生産の若干の増加をもたらすような方向に作用する諸力がまだ完全につみつくされない循環期におこった、矛盾の部分的な爆發である³⁾。」さらに上記の文章に註を付して、「この種の恐慌は、以前にも資本主義におこったことがある。たとえばアメリカでは、1921~1929年の循環のさい、この種の恐慌が1924年と1927年と2回くりかえしておこった。エンゲルスは循環を詳細に分析するときには、『いくぶん局部的で、いくぶん特殊な性格をおびた中間恐慌に注意する必要がある。』と力説した。（ロシア語版全集、第27卷、184頁。1882年1月31日付ベルンシュタインへの手紙）マルクスは『週期的一般的恐慌には、つねに部分的恐慌が先行する』と教えた（ロシア語版全集、第26卷、355頁。1873年9月27日付ゾルゲへの手紙⁴⁾）」とのべている。

3) ヤ・クロンロード Я. Кронрод, 「經濟軍事化の諸条件下におけるアメリカ經濟恐慌成熟の特殊性について」 Об особенностях назревание экономического кризиса в США в условиях милитаризации экономики, 「經濟學の間諸題」 Вопросы Экономики, 1954年1月號。

4) 同上。

1) マルクス, 「剩餘價值學說史」, 第2卷第2部, 邦譯全集, 第10卷, 335頁。

2) 同上, 312頁。

しかし、クロンロードはこの論文のなかで中間恐慌ないし部分的恐慌についてなんら説明を興えていない。それがはっきりしなくては、1948～49年恐慌、ひいては戦後の景気循環過程全體の特殊性が明確にされない。明らかにさるべき事実を明確な規定を缺く概念で表現することはしばしば混乱をさえ招く（事実、部分的恐慌、中間恐慌を若干の生産部門における部分的過剰生産と同一視する見解さえだされている）。性急な推論のまえに中間恐慌とはそもそも何かとの間に答えねばならない。そこで、この小論は、マルクス、エンゲルスの指摘にしたがって、これらがいかにして成立するか、をみとめることにした。

2

中間恐慌ないしは部分的恐慌とは、「本當の」恐慌の中間に存在する、したがってまた部分的な恐慌をさすもので、歴史的には1825年にはじめて一般的恐慌があらわれていろいろ各循環期にみうけられた。とくに19世紀前半には、この中間恐慌は「本當の」恐慌と區別のつかぬほど激しかったので、エンゲルスをして循環の周期を通常の10年でなく5年と誤解させるほどであった。しかし、1942年以後、1循環10年の周期性が確立し、中間恐慌の意義は第2次的になっていった。エンゲルスは、「イギリス労働者階級の狀態」1892年ドイツ語第2版への序論のなかで、この點についてつぎのようにのべている。「本書の本文では大産業恐慌の1周期は5年であるとのべてある。これは、1825年から1842年までの事件の経過から外見上結論された年数の算定であった。けれども、1842年から1868年にいたる工業の歴史は、ほんとうの周期は10年であること、そして中間的恐慌は第2義的な性質のものであって、1842年以後はしだいに消滅したことを證明している。1868年以後には、この事情はさらにまた變化した⁵⁾。「1866年の恐慌につづいて、たしかに1873年ごろにみじかい、輕微な景気の上昇がおこりはしたが、この上昇はながくはつづかなかつた。なるほどわれわれは、當然それがおこつてもよいときに、つまり1877年あるいは1876年に、全面的恐慌を経験しなかつた。しかし、そのかわりには、われわれは、1876年いろいろ、すべての支配的な工業部門における慢性的な停滞状態のうちにある。完全な恐慌もやつてこなければ、また以前われわれが恐慌の前後には當然もつ權利があると信じていた、待望の好況期もこようとはしないのだ。ひじょうな沈滞、すべての事業にたいするいっさいの市

5) マルクス・エンゲルス選集、大月書店版、補巻2、493頁。

場の慢性的な満腹状態、これこそわれわれが10年ちかくも経過しつつある状態である⁶⁾」

1842年までにみられた中間恐慌がそれ以後漸次みうけられなくなったのは、産業資本主義の發展とともに循環が確立していったからである。1942年以前の時期の恐慌はもっぱらイギリスにのみあらわれた。急激な生産力の上昇が国内・国外市場のせまさとぶつかり恐慌がおきても、同時に国内・国外市場を急激に擴大して實現の條件をつくり出すことができた。だから、恐慌は殆ど5年ごとにあらわれたとはいえ、その時期は短く、その深さも比較的淺かった。しかし、1847年の恐慌いろいろ、ヨーロッパとアメリカの資本主義は急速な發展をとげ、かくてこれまでいわば國民的であつた循環は、國際的・世界的になるにいたり、10年の周期が確立したのである。

しかしながら、この循環も1868年以後はくずれて、全般的恐慌もやつてこなければ好況もおとずれぬ「慢性的な満腹状態」があらわれるにいたつた。もっともこの事實はこの時期に循環がなくなったことを物語るものではない。たしかに、エンゲルスは「資本論」の英語版への序言(1886年)のなかでも、「1825年から1867年までたえず繰返した10年ごとの停滞・繁榮・過剰生産・および恐慌の循環は、なるほど、もうお仕舞いとなつたように見える、——但し、ただわれわれを永續的な慢性的な不景氣という絶望の淵に陥し入れるために⁷⁾。」と述べている。しかしこれは、いわば四季のうつりかわりのような、恐慌、不況、活況、好況という循環局面の交替のなかで、恐慌と不況の局面がながく、活況と好況の局面が短くなつた、ことを意味するものと解すべきであらう。(だから、慢性的な不景氣といつても、好況局面が循環から脱落した1930年代の「特殊な型の不況」とは明らかに異つている。)したがつて、10年という周期性も未だに存在していたわけで、事實1882年についで1890年、1900年と世界恐慌が發生している。

では何故、1868年以後、事態は變つたのであらうか。

世界市場、世界經濟の成立は、これを資本主義の成立の時期にもとめるのが常識ではあるが、しかしそれらが現實に成立しおつたのは1867年恐慌以後の時期であつた。「最近の1867年の一般的恐慌以來、大きな諸變化が生じた。交通手段の巨大な擴張——大洋汽船、鐵道、電信、スエズ運河——は、世界市場を初めて現實に作出した⁸⁾。」しかも、たんに世界市場が現實に成立しただけ

6) 同上、501頁。

7) マルクス、「資本論」、第1巻、アドラツキー版、28頁、青木書店版、第1分冊、99頁。

8) 同上、第3巻、534頁。青木書店版、第11分

でなく、この市場における諸國の力關係も變った。これまで、獨占的地位をしめていたイギリスにたいし、アメリカ、ドイツ、フランスが有力な競争相手としてあらわれたのである。こうしたことの上に、各國がそれぞれ高い關稅障壁をめぐらしているの、各國獨自に過剰生産恐慌をうみ出せるような國が、これまでのイギリス1國から4ヶ國にふえることとなった。かくて、4ヶ國が10年に1ぺんづつ恐慌におそわれるとすれば、平均して2年半ごとにどこかの國で恐慌がおこり、事実上つねに恐慌がつづくという事態が現出されうるのである。1886年2月8日付けのニコライ・オン宛の手紙で、エンゲルスはこう述べている。「當地(ロンドン——筆者)では、産業恐慌はよくなりつつあります。そして、イギリスの工業獨占は終りであることを、人々はしだいに氣づきはじめています。アメリカ、フランスおよびドイツが競争相手として世界市場にあらわれるので、そして高い關稅が外國商品をその他の新進工業國の市場から排除しているの、事態は簡単な計算問題となった。獨占があるひとつの大工業國のものであった場合には毎10年ごとに恐慌がおこったとするならば、かかる國が4つある場合にはどうなるか？ 大ざっぱにいえば、4分の10年間にひとつの恐慌、したがって実際には終りなしの恐慌、ということになります。それで間違いありません⁹⁾。」

こうして、他の諸國が恐慌におそわれているということがその國の經濟に否定的影響を與え、恐慌を誘發しないまでも恐慌よりの回復をおくらせ、不況をながびかせることは確實であった。これをイギリスについていえば、その獨占的地位を失ったこと、新しい國外市場の發見が困難となったことが、長い恐慌・不況局面、ごく短い活況・好況局面の系列をこそ、正常な循環とするにいたったのである。

斷るまでもないことだが、前記のエンゲルスの言葉——2年半にひとつの恐慌がおきる——を、全く文字どおりに解して、世界恐慌を否定することは正しくない。前記註8の引用文にすぐつづけて、エンゲルス自身つぎのようにのべている。「過剰なヨーロッパ資本の投下のために世界の全地方で無限に大きく多様な領域が開發されたので、資本が廣く配分され、地方的な過度投機が克服されやすくなっている。およそこうしたことによって、舊來の大ていの恐慌の根源および恐慌發生の機會はなく、大いに弱化されるかしている。そのほか、國內

國外での競争はカルテルおよびトラストの前に退潮し、また、外國市場での競争は保護關稅——イギリス以外のすべての大工業國はこれを自國の周圍にはり廻している——によって制限される。だが、この保護關稅そのものは、世界市場の支配を決定すべき最後の一般的工業戰の開戰準備にはかならない。かくして舊來の恐慌の反復と抗争する要素はいずれも、はるかに強大な將來の恐慌の胚種をみずからのうちに宿している¹⁰⁾」

3

このような1868年以後の情勢のなかでは、中間恐慌ないし部分的恐慌は存在しえないであろうか。すでに上に述べたところから推察されるように、中間恐慌ないし部分的恐慌は存在しうるし、また事實存在した。しかも、おなじく中間恐慌 部分的恐慌とはいへ、それは1842年いぜんのそれとは明らかに内容を異にしていた。

その一例が、1873年の恐慌である。マルクスは「資本論」第1巻第2版への後書きを、つぎのような有名な言葉で結んでいる。「資本主義社會の矛盾にみちた運動は、實踐的なブルジョアにとっては、近代的産業が通過する周期的循環の浮沈において最も痛切に感ぜられるのであって、この浮沈の頂點は、——一般的恐慌である。この一般的恐慌はまだ前段階にあるとはいへ再び進行中なのであって、その舞臺の全面性ならびにその作用の強さにより、神聖プロシヤ・ドイツ新帝國の成金たちにさえ辯證法をたたきこむであろう¹¹⁾」と。マルクスのこの後書きは1873年1月24日付であるが、1873年5月にオーストリアに端を發した恐慌は漸次全ヨーロッパをおそい、9月20日にはアメリカにも及んだ。しかし、それはイギリスには若干の影響を及ぼしたとはいへ、恐慌にはならなかったので、一般的恐慌の到來を否定するかのような意見が生れた。このような見解にたいしマルクスは、「資本論」フランス語版(その後書きの日付は1875年4月28日となっている)にこの後書きを再録するにあたって、「第2ドイツ語版への後書きは1873年1月24日付であり、その公刊ののち幾ばくもなく、そこで豫言された恐慌が、オーストリア、合衆國およびドイツにおいて勃發した。多くの人々は、一般的恐慌は激烈な、しかし部分的な、これらの爆發によって、いわばあらかじめ消耗しつくされたものと誤信している。それどころか、恐慌はその頂點にむかっている。イギリスは中心的爆發の座となり、その反響は世界市場において感ぜられるで

冊, 693 頁。

9) マルクス・エンゲルス, ロシヤ語版全集, 第27卷, 535 頁。邦譯全集, 第21卷, 161 頁。

10) 註8とおなじ。

11) マルクス, 「資本論」, 第1巻, 18 頁。青木書店版, 第1分冊, 87 頁。

あろう¹²⁾。」とつけ加えている。

マルクスによれば、1873年恐慌は部分的恐慌であった。クロンロードが引用したマルクスのゾルゲ宛への手紙はこの頃にかかれたものだが、その前後をもあわせて再び引用しよう。「私は、アメリカのパニックがあまり大規模にならず、イギリスしたがってヨーロッパにたいしてもあまりつよく影響しないものと豫想している。こういった部分的恐慌はつねに周期的一般的恐慌に先行する。それらがあまりに激烈であったとしても、それは一般的恐慌を弱め、その激しさを緩和するだけである¹³⁾」

1873年恐慌が中間的部分的恐慌であったとすれば¹⁴⁾、本當の恐慌はいつ起ったであろうか？ 1873年恐慌には参加しなかったイギリスに恐慌が勃發したのは、1878年であった。マルクスは、1878年11月15日付ダニエルソンあての手紙で、その豫言の適中を、つぎのように誇っている。「私がフランス版の354頁の註で豫告しておいたイギリスの恐慌は、実際に先週勃發しました。友だちら——理論家や實際家は——この注意の根據が十分に根據づけられてはいないようにかれらには思えるので、これを取除くように私に切願しました。アメリカ合衆國、ドイツ、オーストリアにおける恐慌が、イギリスの恐慌を、いわば割引く(escompter)にちがいないと、當時、かれらは確信していました¹⁵⁾」

1873年恐慌がイギリスに波及しなかった事實は何を

12) マルクス、「資本論」, 青木書店版, 第1分冊, 87頁より引用。傍點筆者。

13) マルクス・エンゲルス, ロシア語版全集, 第26巻, 355頁。

14) マルクスは、1873年恐慌によってイギリスの恐慌が「割引」されないことを強調しつつ、1873年恐慌を部分的中間恐慌と規定している。しかし、當時はイギリス以外の主要な資本主義國が殆どこの恐慌にまきこまれていたのだから、むしろイギリスが世界恐慌から脱落したことに特殊性を求むべきではあるまいか？ 1878年の恐慌はもっぱらイギリスにのみみられ、他の諸國をもまきこんでの世界恐慌とはならなかったことを想起すべきである。事實イギリスは、1878年の恐慌につづいて、1882年には一般的な世界恐慌におそわれている。もっとも、エンゲルスは1882年12月22日付のパーベル宛の手紙で、「アメリカにおける恐慌は、この地(イギリス——筆者)の恐慌と同じように、またまだ必ずしも判るところで取除かれてはいないドイツ工業の不況と同じように、本當の恐慌ではなくて前の恐慌からの過剰生産の事後作用だと私には思われる」(ロシア語版全集, 第27巻, 272頁。)と中間恐慌説を唱えているが、1882年恐慌はその規模からいって一般的恐慌と見なさるべきであろう。

15) マルクス・エンゲルス, ロシア語全集, 第27巻, 15頁。邦譯全集, 第21巻, 133~134頁。

意味するのだろうか？ ヴァルガ E. C. Bapra はこの點について、「個々の資本主義諸國の交錯はますます増大してきて、個々の國における循環の性質および眞の恐慌の發生のモメントを規定する決定的要因は、いぜん國內市場の發展である。1873年の恐慌はこのことをとくに明確に示している¹⁶⁾」と述べている。1861~65年のアメリカ南北戦争, 1866年の普墺戦争, 1870~1871年の普佛戦争などによってアメリカとヨーロッパ大陸諸國の經濟は急激な發展をとげ、そのなかで恐慌要因を激成していった。しかしながら、世界貿易にきわめてふかく結びついていたとはいえ、1873年には未だ恐慌發生のための國內的條件が充分そろわなかったため、イギリスは恐慌におそわれなかった。イギリスに恐慌が訪れたのは、イギリス自身の內的諸矛盾の蓄積が恐慌爆發を餘儀なくさせた1878年であった。

なお、歴史的な特殊な例として、保護關稅によって外部の影響から一應隔絶されている國で、國內市場むけの生産が急激に増加した場合、國內市場の擴大が生産の急増と平行できず、いわば摩擦的に中間恐慌がおきる。(しかし、これは同時にごく短期間で解決される。) エンゲルスはパーベル宛の手紙(1882年12月22日付)のなかで、「アメリカ工業は、主として、垣をはりめぐらした國內市場を相手に操業しているのだから、そこでは急激な生産増加をやって局地的中間恐慌がごく容易に成立しうる¹⁷⁾」とのべている。このような中間恐慌(はたして1882年のアメリカ恐慌がそれであったか否かは別として)は、やはり中間恐慌の特殊な例(1842年以前のイギリスと似ている)と理解すべきであろう。

4

中間恐慌ないし部分恐慌を生ぜしめる主要な理由は、各國における內的諸矛盾の發展度の相違であり、それは資本主義の不均衡發展の結果である。そのような要因は獨占資本主義の時期には、かえって激化さえした。この觀點からすれば、獨占資本主義の時代にも、部分的恐慌、中間恐慌は當然存在しうる。たとえば、1920~21年の戦後恐慌を例にとってみれば、それは當時インフレーションが進行中のドイツには波及しなかった。(いわゆる安定恐慌のおきたのは、1924年であった。) フランスでも、破壊された産業の恢復のため市場が擴大し、過剰生産恐慌は生れなかった。たんにすべての資本主義諸國をおそ

16) ヴァルガ, 世界經濟恐慌史, 第1巻第1部, 永住道雄譯, 1937年, 38頁。

17) マルクス・エンゲルス, ロシア語全集, 第27巻, 272頁, 邦譯全集, 第21巻, 256頁。

わなかつただけでなく、その期間も比較的短かった。それは中間恐慌であった。

第2次世界大戦後においても、資本主義世界にたいするアメリカの支配がいかに強かろうとも、アメリカにおける恐慌のいわゆる「しわよせ」だけで、他の資本主義諸國の恐慌は惹起されない。アメリカの1948~49年恐慌にもかかわらず、世界恐慌がおきなかったのはこのためである。ヴァルガは第2次大戦後の資本主義の景気循環を概括して、こうのべている。「過剰生産恐慌は、アメリカが新たに経済の軍事化と軍擴競争にうつったこと、およびこれに結びついた新しい戦時インフレ景気の到来によって中斷された。(中立國以外の)他の資本主義諸國では……循環の過程が異っていた。西ドイツ、イタリア、日本では、生産は終戦後の急落ののち徐々に上昇したが、1948年には未だ1937年水準にはるかに及ばなかった。これら諸國の経済は破壊されており、尨大な失業者がいた。しかし、過剰生産恐慌はなかった。イギリスはドイツと日本の競争のないことを利用して、1937年水準を上廻る水準に自己の生産を擴大した。アメリカにおける1949年の過剰生産恐慌は、世界的過剰生産恐慌とはならなかった。多くの諸國では、その時までには未だ、恐慌發生のための内的條件が成熟しなかったし、アメリカの恐慌は経済の軍事化の結果、他の資本主義諸國に過剰生産恐慌を惹起すためには、あまりにも短かった¹⁸⁾。」

以上みたように、中間恐慌ないしは部分的恐慌は、諸條件のくみあわせが、諸國で發生すべき恐慌が統一的な世界恐慌に發展することを妨げる場合に生れるものであ

る。この點でクロンロードのいう「生産の若干の増加をもたらすような方向に作用する諸力がまだ完全にくみつくされない循環期におこった、矛盾の部分的爆發」という規定は、あまりに一般的な規定といわねばならない。實は、このクロンロードの規定は、戦後景気循環にたいするかれのきわめて一面的な理解と密接に結びついている。すなわち、かれによれば、戦後の景気循環を規定したものは、戦時中の固定資本投資の抑制(アメリカでは固定資本の食いつぶしさえ行われたとかれは主張する)である。擴大再生産を圓滑に進めてゆくためには、この抑制されていた固定資本投資の大巾な増加が必要で、これが「生産の若干の増加をもたらすような方向に作用する力」である。このような力がくみつくされない以上、矛盾の爆發はおのずから、部分的であるというわけだ。このようなクロンロードの主張の本旨についても多くの問題があるがそれはひとまず措くとしても、矛盾の爆發を部分的ならしめた諸要因は他にもいろいろ考えられる筈だ。1948~49年恐慌が中間的な部分的恐慌であったとしても、いかなる諸要因がそれをもたらしたかについてはクロンロードに賛成しえない。部分的恐慌とは、世界恐慌に發展しなかったという意味での「部分的」な恐慌と解さるべきだが、それにしても、とくに第2次世界大戦後のそれについて語る場合には、2つの平行せる世界市場の形成、資本主義の全般的危機の第2段階における経済軍事化と恐慌、帝國主義的諸對立の激化などの諸問題と密接に結びつけて考えられねば無意味である。だから、中間恐慌および部分的恐慌という言葉をマルクス、エンゲルスの古典から引用して、現實の事態に一方的にあてはめることは、けっして有益なこととはいえない。

18) E. C. Варга 「帝國主義の經濟と政治の基本的諸問題」 Основные вопросы экономики и политики империализма 1953年, 39頁。